

陳元光信仰と福建漳州九龍江デルタ社会
——陳元光部將信仰をめぐって

亀岡敦子

はじめに

筆者はこれまで、基層社会の構造の実態およびその変容過程について、中国の東南沿海に位置する福建省を地域の対象とし、唐代（六一八〜九〇七）〜清朝初期（一七世紀）までの比較的長いスパンを時代的对象として、分析・検討を加えてきた。

福建省の基層社会では、父系血縁集団である宗族の発達や、各地各様の土着的な神々に対する民間信仰の盛行が顕著にみられることが指摘され、宗族組織と民間信仰との村落社会における機能や相互の関係性の実態が明らかにされてきた。¹⁾ 人々の生活の場において両者は併存し、帰属意識・凝集力の形成、社会秩序維持、国家との関係の媒介といった役割を果たしている。²⁾

同族によって構成される村落である単姓村は血縁を社会紐帯とする一方で、複数の宗族が居住する雜姓村では、

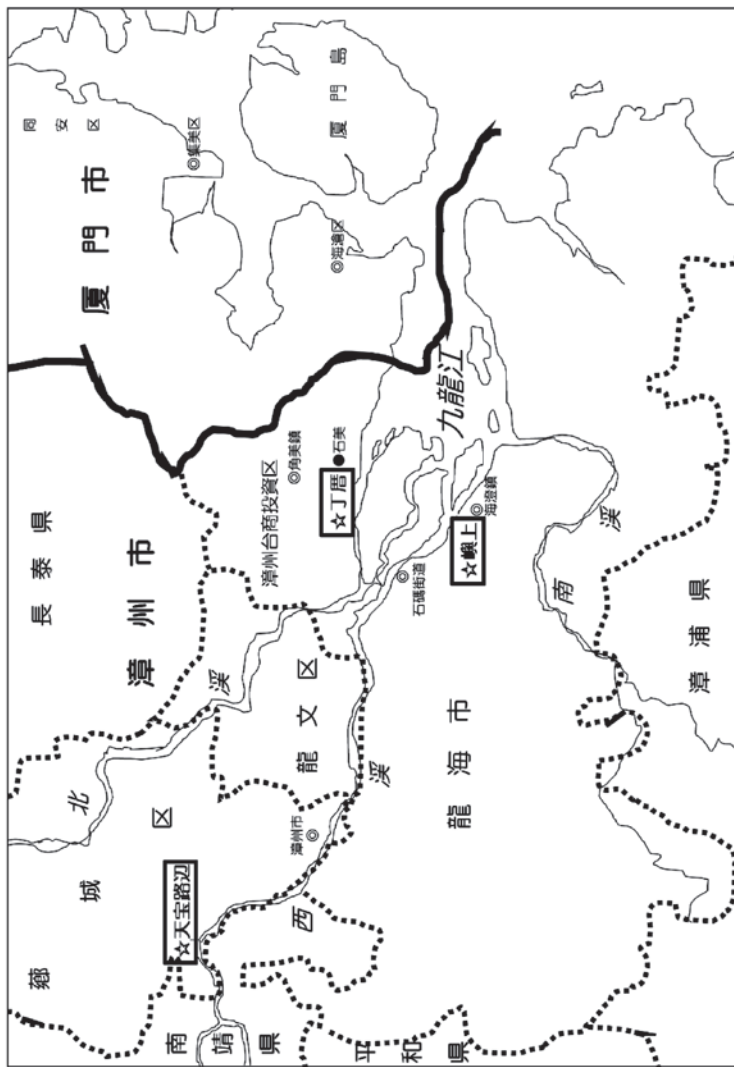
宗族同士が生活空間を共有し、神を祀った廟を媒介として宗族連合が形成され、村落の凝集力の源となっていた。宗族と民間信仰の間には相互作用関係が存在し、宗族が民間信仰の主体であるのみならず、宗族と宗族との間の関係も、どの神を信仰しているかによって異なるという⁽³⁾。このような状況を踏まえると、前近代福建の基層社会における宗族と民間信仰の形成、実態、相互関係の変容過程を検討することが、福建という一地域に固有の歴史的世界を解明するにあたって重要な課題となる。

しかしながら、現代の福建社会を対象とした現状分析的研究においては、歴史的視点がやや欠けており、宗族と民間信仰の相互関係が生まれた歴史的過程については未だに明らかでない部分が多い。前近代福建の宗族と社会組織については、社会経済史の分野における研究の膨大な蓄積がある⁽⁴⁾。その中で鄭振滿は、莆田江口平原では、同じ水利灌漑系統に属する村落が村落を越えて水利をめぐる社会組織を形成し、それらの村落集団の凝集力の中心として重要な役割を果たしたのが、村落の建立した神廟系統と祭祀組織であり、村落社会において大きな影響を及ぼしたとしている。ただし、この中で宗族の問題については触れられていないため、宗族と民間信仰の関係については不分明である⁽⁵⁾。

前近代福建の民間信仰について、B・テレハハールは、福建を代表する八つの民間信仰の起源と拡散の実態についての研究の中で、陳元光信仰の歴史的展開についても論じた。彼は、福建の各地域の地方志の記載内容に依拠して、祠廟の創立時期と分布を分析した。しかしながら、彼の研究は地方志というきわめて限定的な史料のみを依拠していることもあり、諸神の出身とされる地域で、村落や宗族レベルの共同体において、何時如何にして信仰が受容されていたのかという問題については十分には検討されていない⁽⁶⁾。

本稿では、福建南部沿海に位置する漳州地域の、特に九龍江河口地域（以下、「九龍江デルタ」と呼称する）

[地図] 九龍江デルタ



※「福建省情地図集」編纂委員会編「福建省情報地図集」福州：福建省地図出版社（2009）をもとに筆者が作成

に存在する陳元光関連祠廟を中心としてとりあげ、当該地域における陳元光信仰と地域社会の歴史的展開について初歩的な検討を行う。それによって前近代福建の基層社会における宗族と民間信仰の形成、実態、相互関係の変容過程を明らかにし、ひいては福建という一地域に固有の歴史的世界を解明する手がかりとしたい。

陳元光とは、福建南部沿海に位置する漳州地域の地域神であり、現在では〈開漳聖王〉とも呼称されている。明末以降、漳州の民衆が東南アジアや台湾に大量に移住したため、陳元光への信仰は現在では東南アジアや台湾にも広く伝播している。⁽⁷⁾

九龍江デルタは、現在は漳州台商投資区(旧龍海市角美鎮)および龍海市の九龍江沿岸にあたる地域〔地図〕で、隆慶元年(一五六七)以降の行政区分でいえば、龍溪県の二十八都および二十九三十都と、海澄県(隆慶元年に設置)に属する地域である。明代以降、福建南部の地域社会の秩序維持に大きな役割を果たしたが、宗族と祭祀組織であるといわれる。福建沿海部では、祠堂の建設と族譜の編纂を通して宗族を形成する動きが見られるようになるが、明代中葉になると広範囲に普及した。一方で、祠廟を中心とした祭祀組織も共存し、宗族単位であるいは複数の宗族が集まった村落単位で祠廟の祭祀を行った。⁽⁸⁾

地方志に記録された廟は特別な存在であり、記録されなかった廟の方が多数を占めたことは疑いない。したがって、各信仰の実態により迫るためには、地方志以外の文献を使用して、各地域の実情を踏まえて、より徹視的な考察を行うことが不可欠であろう。

第一章 陳元光と部將の信仰

民間の廟については、すべてを把握することは難しいが、丁荷生・鄭振滿の報告によると、陳元光を祀る廟は、現在、漳浦県に九五座存在するという。また、林本諒の調査によると、龍海市（現在の漳州台商投資区、明清時代の龍溪県・海澄県の一部）には、陳元光を主神あるいは配神とする廟が三一座現存する〔表1〕⁹⁾。

陳元光に加えて、〈陳元光遠征随伴伝承〉に登場する陳元光の部將も信仰を集めている。陳元光とともに中原から遠征して福建に侵入・定住した部將は、明代の万曆『漳州府志』において初めて地方志上に登場し、三〇人の姓名が記載されている。崇禎『漳州府志』では、陳元光が「五十八姓」の部將を率いて福建に遠征したとされており、清代の康熙『漳州府志』では、一三二人の部將に号令をかけたと記されている。当該書にはそのうち九五人の姓名が記され、光緒『漳州府志』では一人増えて九六人の姓名が記載されている。また、これらの部將（あるいは陳元光の「家族」）のリストは『潁川陳氏開漳族譜』（陳禎祥編纂、民国五年（一九一六）刊）に「大宋紹興拾參年追封陳聖王許昭侯等勅」として、『平和侯卿陳氏族譜』（道光九年（一八二九）四修稿本）には「増封誥宋紹興二十年総封家屬部將大小官員」として収録されており、陳元光や陳元光の家族と子孫、および配下の部將が南宋紹興十三年（一一四三）あるいは紹興二十年（一一五〇）に授与されたという封号が列挙されている¹⁰⁾。

陳元光信仰の体系において信仰を集める代表的な部將は、李伯瑤「馬仁」「許天正」であり、当地の人々からは、李白瑤は「輔信（輔勝）將軍」、馬仁は「輔順將軍」あるいは「馬公爺」、許天正は「宣威將軍」とも呼ばれている。これらの部將の姓名ならびに封号は、「大宋紹興拾參年追封陳聖王許昭侯等勅」や「増封誥宋紹興二十年総封家屬部將大小官員」に記載されているものと一致する。

[表1] 龍海市開漳聖王廟宇

鎮	村	社	名称	始建	主神	配神	備考
東園	過田	峨山東	龍応寺	五代後唐	仏	陳聖王	
東園	鳳山	爐内	廣惠聖王廟	明宣徳	開漳聖王	李伯璠 馬仁	
東園	鳳鳴	嶺後	威惠廟	宋政和2(1112)	開漳聖王	輔信	
白水	西鳳	碧南	石龍宮	明初	開漳聖王	輔信	
白水	郊邊		旗山宮	元末	開漳聖王	林王 詹王	
白水	崎岾	鶴頭	鳳安宮	清	開漳聖王		
白水	方田		大廟	明	開漳聖王	輔信	
白水	金鰲	西峰	西峰廟	元初	開漳聖王	馬仁 輔信	
白水	磁灶		隆壽宮	明末	開漳聖王		
白水	下田	下土	赫靈宮	明末	開漳聖王		
白水	山美		鶯山寺	明	陳聖王 如来仏		
浮宮	霞圳	烏脚寮	威惠廟	1993重建	開漳聖王		
浮宮	霞威	東邊	振東宮	清光緒24(1898)	開漳聖王	馬仁 輔信	
浮宮	邱厝	下柯	新安宮		開漳聖王		
海澄	嶼上	儒山	儒山廟	明	開漳聖王		
海澄	合浦		合浦大廟	宋	開漳聖王	輔信 玄天上帝 良間王公	
海澄	黎明	田尾	仁美廟		開漳聖王		
榜山	南苑	陳厝	翠桐廟	元	詹英 林孔著	開漳聖王	
榜山	田邊	鳳田	鳳田廟	明	開漳聖王		
榜山	洋西	渡頭	贊范宮	約明	魏媽	陳聖王	魏母は陳元光の母親だと伝えられるが、調査を要する
港尾	島美		朝陽宮	元	開漳聖王		
隆教畚族郷	新村		姑龍廟	宋	陳聖王 玄天上帝 韓丹爺		
隆教畚族郷	新村		西南院廟		開漳聖王		
隆教畚族郷	白塘		聖宮	清嘉慶間(1796-1820)	開漳聖王		
漳州開発区	大径	田中央	福安宮	明初	開漳聖王		
漳州開発区	白沙		碧沙宮	1991重建	開漳聖王		
程溪	下庄	横山	開漳聖王廟	清	開漳聖王		
顔厝	片邊	田中	田中祖廟	清	開漳聖王	輔順 観音 謝府元帥	
角美	沙坂		金沙廟	明	開漳聖王	輔信	
角美	石厝	下店	威惠廟	宋	開漳聖王	部将	いまだ重修されていない
角美	楊厝	碧湖	趙山廟 (五社庵)	清乾隆間(1736-1795)	開漳聖王		

※林本諒「龍海市開漳聖王廟宇」同『龍海市開漳聖王相関参考資料』私家版(2011)より作成

[表2] 開漳聖王部将廟宇

鎮	村	社	名称	始建	主神	配神	備考
東園	東園	下田	輔信將軍廟	明清	輔信		
東園	嶺後	寧安	崇真院		輔信		
東園	嶺後	埔兜	埔兜廟	明	輔順		
東園	港邊		港浜廟	明正徳間(1506-1521)	輔信 宣威許		
東園	港邊	槐浦	馬大將軍廟		馬仁		
白水	山邊		境安宮	清		輔信	
浮宮	八坑	寨仔	八坑廟			輔信	
榜山	雩林		騰里廟	約明	許天正 佛		
隆教畚族鄉	新村	外洋	外洋廟	清	輔順		
隆教畚族鄉	新村	龍会橋	龍会橋廟		輔順		
九湖	田墘		公爺廟		馬仁		
九湖	埔美山		宝豊堂	明		輔順	
顔厝	水頭		馬公爺廟	明	輔順馬仁		
顔厝	上洋	浦西	浦西庵	明清		馬公爺	
顔厝	上洋	溪尾	安明廟	宋	輔順 蔡德明		蔡德明が何者かには調査を要する
角美	流伝	中社	將軍廟	明	李伯瑤		
角美	石厝	下邊	威惠廟	宋	輔信		
角美	石厝	上店	威惠廟	宋	輔順		
角美	吳宅	林美	東山宮	清道光間修(1821-1850)	輔順		
角美	石美	北門	山美廟	唐	輔信李		
角美	霞嶼		清遠宮		輔順 輔信		いまだ重修されていない
角美	洪岱		靈応廟	佛	輔順 輔信		

※林本諒「龍海市開漳聖王廟宇」同『龍海市開漳聖王相関参考資料』私家版（2011）より作成

龍海市には部将を配神とするか、あるいはそれ自体を主神とする廟も存在する〔表2〕。〔表1〕および〔表2〕によると、陳元光を主神とする廟のうち、李伯瑤が八か所、馬仁が四か所の廟で配神として祀られている。部将を主神とする廟としては、李伯瑤が主神の廟一〇か所、馬仁が主神の廟一三か所、許天生が主神の廟二か所がある。このほかにも、「詹英」と「林孔著」も主神としている廟が二つあり、陳元光の「母」とされる「魏母」を祀った廟も一つ存在する。ここから、特に篤い信仰を集めているのは馬仁と李伯瑤であることがわかる。陳元光は遅くとも北宋時代には漳州で信仰されていたが、彼ら部将は如何にして信仰を集めるようになったのか。

康熙『平和県志』（康熙五十八年（一七一九）刊）には、

威惠王廟。在東門外。以祀唐侯陳元光也。光開漳闢土、血食於漳、俎豆百世、擬社稷焉。（中略）初漳郡未有建廟。嗣聖間廟有雲霄。貞元二年、遷州治。宋建炎四年、郡始立廟、而各縣鄉村、皆設廟矣。自五代暨宋、累封靈著順応昭烈広済王。淳祐間、令春秋致祭。明正祀典、改封為昭烈侯。漳人称州主王。今龍溪・漳浦、歳春秋仲月、有司尚有致祭。惟和邑独否、只民間奉祀而已。廟前後二進、并祀夫人种氏及柔懿夫人与二將軍焉。或曰柔懿夫人元光女也。從元光征蛮有功、故亦祀之。

威惠王廟。東門外にある。唐侯陳元光を祀る。〔元〕光は漳州を設置して土地を開墾したので、漳州で供物を捧げて祭られている。何代にもわたる長い間、社稷と同じように祭られてきたのである。（中略）漳州にははじめ、廟は建てられていなかった。唐の嗣聖年間（六八四～七〇四）に廟は雲霄にあった。貞元二年（七八六）、州の長官である知州の役所の所在地を移した。宋の建炎四年（一一三〇）、漳州の衙門は始めて廟を建て、そうして各県鄉村にはみな廟があるようになった。五王朝の時代から宋の時代に至るまで、たび

たび封号が与えられて、靈著順応昭烈広濟王となった。宋の淳祐年間（一二四一～一二五二）に、役所が命じて春と秋に祭祀を執り行わせた。明の正祀典では、改めて昭烈侯に封じたが、漳州の人は州主王と呼んだ。現在、龍溪県、漳浦県では、一年の内で仲春と仲秋に、役人がなお祭祀を行っている。ただ平和県だけはそうではなく、ただ庶民の間で祀っているだけである。廟の前後は二進であり、あわせて夫人种氏と柔懿夫人与二將軍を祀る。あるいは、柔懿夫人は元光の娘であるともいう。陳元光に従って蛮を討伐した功績があるので、また祀っているのである。¹²⁾

とある。清代康熙年間（一六六二～一七二二）の平和県では、陳元光のほか彼の「夫人」种氏と娘であるとも言われる「柔懿夫人」と「二將軍」を祀っていたのである。种氏と柔懿夫人はともに前掲の「大宋紹興拾參年追封陳聖王許昭侯等勅」や「増封詰宋紹興二十年総封家屬部将大小官員」に記載されている。二將軍がどの神を指すのかわからないが、嘉慶二十一年（一八一六）刊の嘉慶『雲霄庁志』にはその手がかりとなる記述が存在する。

迎威恵王。備儀仗鼓吹灯綵、巡行郷社。郷社各備牲醴品物、致祭祈福。其宿宵之处、演劇娛神、迎関帝君【正月十三日暨五月十三日】・天后聖母【三月廿二】亦然【參和志】。雲霄迎威恵王暨王后、馬・李三元帥、王子女神像、俱出境十五入廟。郷社各主一神。擡搶爭先、奔騰衝突、有因而啓鬪者。西林・下營・西門皆然。是日營庁俱出彈压諭禁。（筆者註：【一】内は割注。）

「上元節には」威恵王を迎える。儀仗と太鼓・笛および飾り提灯を用意し、郷社を巡行する。郷社にはそれぞれ供物を供え、お祭りをして福を祈る。神が夜お泊まりするところでは、演劇を催して神を楽しませる。

関帝君をお迎えするとき【正月十三日と五月十三日】と、天后聖母をお迎えするとき【三月二十二日】もまたそうである【平和県志参照】。雲霄では威恵王と王后、馬・李二元帥、王の子女の神像を迎え、ともに境を出て十五日に廟に入る。郷社にはそれぞれ「境」主の神がいる。高く掲げてぶつかり、先を争って、走って衝突し、なにかあれば争いの発端を開く。西林、下營、西門「の威恵廟」はみなそうである。この日は、雲霄宮と雲霄庁ともに出て弾圧し、論して聞かせ¹³⁾る。

雲霄一帯では、陳元光のほか、陳元光の后と子女および「馬元帥」と「李元帥」を祀っていたという。陳元光の妻と子女、二人の「元帥」が登場し、平和県と雲霄庁は以前ともに漳浦県に属し、つながりが深い地域であるということから、上記は平和県の威恵王廟で祀られていた神と同一の神である可能性がある。陳元光の夫人种氏は『宋会要輯稿』礼二〇一—二四二における漳浦県の陳元光祠に祀られる神々への封号の授与一覽に見いだされ、南宋建炎四年（一一三〇）八月に初めて「恭懿夫人」という封号が授与された。また、紹興二十七年（一一五七）四月には息子の「陳珣」に初めて「昭甦侯」の封号が下賜された。したがって、南宋時代の漳浦県に起源を持つ神であることがわかる。しかしながら、娘や「將軍」、「元帥」についての記載はない。しかしながら、明末の万曆元年（一五七三）に刊行された万曆『漳州府志』には『元光家譜』などの陳姓の族譜に依拠して、陳元光とともに入閩した「部将」の一覧が掲載されている。しかし、それらの部将の〈神〉としての「封号」には触れられていない。陳元光の「大宋紹興拾參年追封陳聖王許昭侯等勅」が掲載された『潁川陳氏開漳族譜』は民国五年（一九一六）刊、「増封詰宋紹興二十年総封家屬部将大小官員」の掲載された『平和侯卿陳氏族譜』は道光九年（一八二九）編纂であり、地方志上における部将一覽の完成形は康熙『漳州府志』や康熙『漳浦県志』に載せ

られており、これは『陳氏家譜』の「宋紹興二十年封冊」に拠っている⁽¹⁴⁾。このような勅封を受けた「部将」神のリストが清代康熙年間（一六二二～一七二二）には漳州府周辺に流布していたのである。したがって、陳元光の「部将」たちが「神」として信仰されるようになるのは、陳元光やその直系の「家族」と比較すると新しい時期であり、清代前期以降のことであると比定できよう。

陳元光信仰とその祠廟は九龍江デルタ社会でどのような変化を遂げていくのか。そして「部将」の神々はそれによどのように関係しているのか。そこには如何なる歴史的背景があるのか。筆者は二〇一一年一月一九日～一月二一日、二〇一一年三月二九日～四月一日および二〇一一年七月二六日～二九日に断続的に漳州市区および龍海市において陳元光関係祠廟と宗族の調査を行った。また、二〇一八年一〇月三一日～十一月二日、十一月六日～八日に追加調査を行った。本稿ではその際に収集した族譜、碑文、調査報告、廟の「簡介」などのパンフレット類のほか、ウェブサイトの情報および地方志に基づいて、上記の問題について検討したい。

第二章 白石丁氏と趙山廟

漳州台商投資区（旧龍海市）楊厝村碧湖社（明清時代の行政区分であれば漳州府龍溪県二十九三十都）には、「趙山廟」と呼ばれる廟がある。清乾隆年間の創建と伝えられ、陳元光を祀り、五社庵とも称されている「表2」。筆者はこの廟を実地に踏査していないが、同村丁厝社（漳州府龍溪県二十九三十都白石社）の丁氏一族の族譜『白石丁氏古譜』（清嘉慶二年（一七九七）編纂）には、同名の廟に関する伝承が記載されており、その由来について述べられている⁽¹⁵⁾。明末清初を生きた二四世丁世勳が『白石丁氏古譜』において語るところでは、以下のとお

りである。

先是本家七五致政、諱自得、字德彰、為進士潛仲公嫡孫。於宋端平二年、捨建慈濟宮三座、在前社南向宮東畔、另蓋護屋為道士房。後其孫光祖、另砌石座一台、以奉七五致政。檀越主歲取宮後及兩畔地園租、歲供綿布二疋、為香灯者。端平間、東洋社人、求本家地基一片在東洋頭、蓋庵二座併捐金。起蓋一完。今因比家與廟俱燬於兵火、廟基還本家、檀越主子孫佃耕。迨元至正二年、白石前五伝社衆、欲移趙山廟於社中而難其地。到本家求七五致政所捨慈濟宮東辺道士房一帶吉園地、起蓋趙山廟。上堂祀陳州主元光、堂前兩廡、蓋東閣・西閣、祀諸司・馬舍人配饗。有二門及大門、後就疊土工、為蓋土庁。北至山頂水分流、南至大門外庭前路。東閣後倚陳家屋、西閣後倚道士房。元末、因慈濟宮燬於乱、只存道士房。

はじめ、本家の七五致政、諱は自得、字は德彰は進士潛仲公〔訳註・慶元五年（一一九九）の特奏名進士である九世丁知幾〕の嫡孫である。宋の端平二年に、「土地を」寄附して慈濟宮三座を建てた。「それは」前社の南向宮の東側にあり、別に守衛小屋を建てて道士房とした。のちに自得の孫の光祖が、別に石でできた台を築き、七五致政を祀った。檀越主（七五致政の子孫）は、毎年、慈濟宮の後ろと両隣にある園地からの租を取って、毎年綿布二疋を供給して、「宮の」灯明としていた。端平年間に、東洋社の人々が、庵二座を建てるために東洋頭に一つある本家の敷地が欲しいと言ひ、あわせて「庵の建設の費用を」寄附して欲しいと言つてきた。庵の建設が始まって、すべて完成した。今は、家と廟がともに兵火によつて破壊されたので、廟の立つていた土地は本家に変換され、檀越主「である七五致政」の子孫が小作した。元の至正二年、白石前五伝社の人々が、趙山廟を「白石前五伝」社中に移そうとしたが、その土地は「風水が悪く」難しかった。

本家にやってきて七五致政が寄附して建てた慈濟宮の東隣の道士房一帯の風水がよい園地を要求し、趙山廟を建てた。上堂には陳州主元光を祀り、堂前の両廡には東閣・西閣を建て、諸司と馬舎人を配祀した。二門と大門があり、後ろ側は土木工事を繰り返して築山と作った。「趙山廟の敷地は」北は山頂まであり、「山から」水があちこちに向かつて流れ、南は大門の外の庭前路まである。東閣のすぐ後ろ側は陳氏の家屋であり、西閣のすぐ後ろは道士房であった。元末に、慈濟宮は兵乱によって焼かれ、ただ道士房だけが残った。⁽¹⁶⁾

一一世の丁自得は南宋端平二年（一二三二）に土地を喜捨して官港のほとりに慈濟宮三座を建造した。慈濟宮の祭神については『古譜』では触れられていないため、未詳である。しかしながら、漳州府龍溪県二十九十都に境を接する泉州府同安県積善里の白礁には、呉本（呉真人）を祀り、宋代に朝廷から「慈濟」の廟額を賜った「慈濟宮（廟）」が存在し、同安近辺には呉本を祀った廟が多数存在する。また、「懿蹟紀」に記載される三世丁遷の伝に附された四世丁祖の伝には「宋仁宗朝の呉真君は「我が家とは」一家のように親密であり、書をよくした。我が家のためにこの「三世祖の残した」頌および叙を再び写し取って祠堂に贈った。そうして代々守るべき家規とした。その扁額の末尾に題して、天聖五年（一〇二七）臘月吉日、泉州府白礁濮陽布衣老人呉本が謹んで拜命して書く」とあり、呉本と一族との緊密なつながりを主張している。⁽¹⁸⁾ このことから、白石丁氏の「慈濟宮」は呉本を祭った廟であると見てよいだろう。元の至正二年（一三四二）に白石前五伝社の人々が、「趙山廟」という廟をもとの場所から風水のよい慈濟宮の東隣の道士房一帯の園地に移そうとした。丁氏一族はこれを了承して、趙山廟を立てた。そこに祀られていたのは「陳州主元光」すなわち陳元光であった。⁽¹⁹⁾

白石前五伝社の人々については不詳であるが、慈濟宮の東側にある趙山廟の東閣に近接して陳氏一族の家屋が

存在していたと記録されている。したがって、丁氏一族は、本来白石前五伝社で趙山廟を立てて陳元光を祀っていたのは陳氏一族であったと認識していたといえよう。「懿蹟紀」の一世丁自得の伝によると、明末清初には趙山廟は「五甲社」に所在し、檀越主である丁自得が祀られていたという。²⁰⁾したがって、趙山廟は、陳氏一族の廟であったが、丁氏一族の先祖代々の土地に移ってきたことで、結果として丁氏一族の祖先である丁自得が檀越主として祀られ、丁氏一族が信仰する祠廟となったのである。加えて、丁氏一族は本来呉真人を一族の信仰の拠り所としていたが、早期に失われて趙山廟だけが残り、これは明末清初の時点で現存した。これによつて、丁氏一族の村落の信仰の中心は、呉真人から陳元光へと移り変わったのである。筆者はかつて丁氏一族による（陳元光遠征随伴伝承）の受容と宗族の形成について論じたが、²¹⁾丁氏の宗族形成時期は明代中葉以降、伝承の受容は明末以降のことであると結論づけた。丁氏一族の信仰が変容し、趙山廟に関する伝承が明末清初に語られたことは、この過程と相互に関連していると考えられよう。

趙山廟には「馬舍人」という神が配祀されていた。これはどのような神なのか。丁氏一族は以下のように記録している。

唐麟徳間、有曾鎮府者、始以節鉞來漳既老、委於陳將軍政。政卒、子元光嗣。始祖於曾為婿、於陳為世交。漳土底定、詔元光為州刺史、始祖為別駕承事郎。其行九、故呼為九承事郎、即亦稱為丁承事云。始祖家白石象山、曾鎮府家白石福井社、遺蹟尚存。土人猶能言之、孫子有散處近社者、時諸舍人勞於王事者、歿後近鄉多廟祀之。始祖婿趙舍人、居象山福井間。今吾鄉所祀者是。王舍人、石美是。馬舍人・李舍人左右、皆是陳將軍廟。洪坑是。俱在本都中。

唐の麟徳年間（六六四～六六六）に、曾鎮府という者がいて、始め將軍の官職を得て漳州にやって来たものの、既に年を取っていたので、「役目を」陳政將軍に委任した。陳政は死去し、子の陳元光があとを継いだ。始祖は曾の婿であり、陳とは先代からつきあいがあった。漳州の領土は鎮まって安定し、「皇帝は」陳元光に詔を下して行政長官である漳州刺史に任命し、始祖は副長官の別駕承事郎となった。始祖と同世代の族人の中で、排行は九だったので、それゆえにもとは九承事郎と呼び、また丁承事とも呼んだという。始祖は白石象山に居住し、曾鎮府は白石福井社に居住した。その遺跡はまだ残っている。土地の人は、いまだによく言う。「彼らの」子孫にはこの近辺の村に分散して住んでいる者がいて、当時、諸舎人は王の命に対して力を尽くしたので、死後、近隣の郷里では多く諸舎人を祀った。始祖の婿は趙舎人であり、象山と福井の間に居住していた。今、我が郷で祀っているのは趙舎人である。石美で祀っているのが王舎人である。馬舎人と李舎人の左右はみな陳將軍の廟である。洪坑にあるのがこれである。ともに本都にある。⁽²²⁾

これによると、丁氏一族は唐代の丁儒（九承事郎）という人物を始遷祖としているが、丁儒とともに漳州を平定する功績をあげたものが「舎人」たちである。二十九三十都には、丁儒の婿である趙舎人のほか、石美で祀られている王舎人もいた。洪坑には陳將軍と馬舎人、李舎人が祀られていた。趙山廟に祀られた馬舎人とはこれを指すのであろう。陳元光も共に祀られているが、これは丁氏の主張では丁儒と陳元光が旧知の間柄だからである。そして、これらの舎人はその「子孫」が祀っていたのである。⁽²³⁾

以上の伝承から導き出されることは次のとおりである。丁氏一族は本来、宗族の守護神として呉真人を祀っており、その廟は慈濟宮といい、丁自得が土地を寄附して南宋端平二年（一二三五）に建てたものであった。元の

至正二年（一三四二）に、白石前五伝社の人々が趙山廟を慈濟宮の敷地内に移した。越山廟には陳元光と「馬舍人」が祀られていた。丁氏一族の伝承によると「舍人」とは王命に對して功勞のあつた者である。これら「舍人」が丁氏の始祖丁儒やその舅の曾鎮府の部下たちを指しているのかどうか、本史料からははっきりとわからないが、二十九三十都には王舍人・趙舍人・馬舍人や李舍人といった「舍人」神が祀られていた。しかし、馬舍人や李舍人は陳元光に配祀されていたので、陳元光の「部將」神であるといえる。

越山廟の創立年代について、林本諒の調査によれば、趙山廟は清乾隆年間（一七三六―一七九五）の始建であるという。これは趙山廟が元代から存在していたという記述と矛盾する。これは何を意味するのか。次章では儒山霞井李氏一族と儒山廟についての事例からこの問題について考察したい。

第三章 儒山霞井李氏と儒山廟

龍海市海澄鎮嶼上村許坑社（明清時代の海澄県八都儒山社）に儒山廟という廟が存在する。この廟には「開漳聖王」および「輔信將軍」と「金徳夫人」が祀られている。また、儒山廟には「仏祖廟」が併設されており、観音大士（観音菩薩の道教風の呼称）を祀る。この廟について、古くは万曆元年（一五七三）刊行の万曆『漳州府志』に記載があり、「唐將軍」を祀るとある。崇禎『海澄県志』によると「唐靈著王」を祀り、廟宇は広々としていたという²⁴。李伯瑤の子孫を自称する海澄県八都の儒山霞井の李氏の族譜『儒山李氏世譜』所収の「儒山廟誌」は、乾隆三十八年（一七七三）に族譜が編纂されたときに同時に儒山霞井李天派子宗氏によつて記されたものであり、その中には「李氏大唐將軍碑記」が収録されている。そのあらまは以下のとおりである。

祖先の李伯瑤は、その武勇と兵法を買われて朝廷から重用され、福建の「蛮」と戦って平定しようとしていた「中郎將」陳元光を助けるため、皇帝の勅命を受けて福建に入った。李伯瑤は兵を率いて賊を討った。その後、李伯瑤は一三人の息子を呼んで、賊を征伐して福建を平定した。漳州の人々は大いに感謝したという。皇帝は李伯瑤を「為輔則勝（勝補佐官とすれば勝つ）」ということから「輔勝將軍」の称号を与え、死後は廟を建てて祀ることを約束したという。李伯瑤の一三人の息子はそれぞれ福建各地の郡守に任命された。李伯瑤は死後、「威惠」という諡を授与され、漳州の北溪の東の虎形山に埋葬された。息子たちはその後も賊の征伐を行い、儀鳳年間（六七六〜六七九）に当該地域は平定され、李伯瑤や息子たちの功績は皇帝に称えられた。元和十年（八一五）に、漳州人の請願を受け、憲宗はこの功績を碑に刻むことをゆるした。そして韓愈（七六八〜八二四）に事実の経過を記させ、詞を贈らせたという。²⁵

すなわち、「李氏大唐將軍碑記」とは、李氏の祖先である李伯瑤の来歴、さらには「輔勝將軍」として祀られるに至る経緯が記されているものである。李伯瑤とその息子の功績は、漳州人のみならず唐の憲宗からも讃えられた。さらに碑文に記したのは韓愈であったという。「李氏大唐將軍碑記」が族譜に記録され遺されていることは、李氏一族にとってこの碑文が重要な意味を持っていたことがうかがえよう。

また「儒山廟誌」によれば次のようにある。

我族儒山並築三廟、石碑為記詳載家譜。山右一廟兩進、奉祀山西夫子帝像。山中一廟三進、祀我列先祖考妣神位。山左一廟三進、中進祀唐勲臣中郎將陳元光謚聖王及先鋒馬仁爺、前進祀我家將軍李白瑤公字崑生、又字崑宗、謚武惠聖侯、並十三子列座儀像。碑記在儒山之廟左縁。前進崩壞、石碑失落。特將我家旧譜所誌碑

詞、仍旧附録於譜中、以壯神光之英靈、昭垂儒廟乎永遠。時乾隆三十八年歲次癸巳季冬閩省漳郡圭海澄江儒
山霞井李天派子宗氏敬書拜

我が一族の儒山には三廟が並んで築かれ、石碑は詳細を記して「その石碑を」家譜に載せた。山の右の一廟は兩進であり、山西夫子帝像を祀っている。山の真ん中の一廟は三進であり、我が祖先の男女の位牌が置いてある。山の左の一廟は三進であり、中進には唐代の勲臣である中郎將陳元光諡聖王および先鋒將軍馬仁翁を祀っている。前進には我が家の將軍李伯瑤公字崑生、又の字を崑宗、諡を武惠聖侯ならびに一三人の息子の神像を順番にならべて祀っている。碑文は儒山の廟の左の縁にあつた。前進は崩壊し、石碑は失われた。ただ我が家の旧譜が記録していた碑の文章は、いままでどおり族譜の中に附録されており、輝かしい英靈を盛大に記録することで、儒山廟を永遠に後世に残す。時に乾隆三十八年□次癸巳十二月、福建省漳州海澄県儒山霞井李天派子宗氏、謹んで書く。

儒山廟は、本来は一つの廟を指すのではなく、儒山の山中に建てられた三廟をまとめて儒山廟と呼んでいたことがわかる。右側に「山西夫子帝」すなわち閩帝が、真ん中の廟には李氏の祖先の位牌が祀られていた。左側の廟は三進の構造であり、中進に陳元光と馬仁を祀り、前進に李伯瑤と一三人の息子が祀られていた。後進については言及されていないが、後掲の碑文の記述から、観音大士（観音菩薩の道教風の呼称）が祀られていたのではないか。このように李氏は儒山および儒山廟が李氏の所有であると認識していた。ただし、前進の李伯瑤を祀った部分は、乾隆三十八年（一七七三）の時点で崩壊して現存していなかったという。そうであるならば、現在の儒山廟はいつ建てられたものなのか。本廟に現存する、清嘉慶十三年（一八〇八）に海澄県知県として赴任した張

家幹による嘉慶十六年（一八一二）の碑文には以下のようにある。⁽²⁶⁾

儒山廟、澄西之古廟者也。崇祀開漳聖王。自來凡寧澄者、每歲立春之日、於是廟行耕藉之日焉。但廟久寢敬、傾廢多年、衆莫興之者。及嘉慶辛酉歲監生蘇王璘等、慨然任事、募衆重興。而前座廟宇宏敞大觀矣。後有宝刹、祀大士。於丙寅年、又被風雨摧凌毀壞。生復募而葺之。余蒞澄、於此勞農、覘其前後廟貌、俱煥然一新。此神明之殿宇永固。而王璘之倡義足風矣。是不可以不誌。文林郎知海澄縣事張家幹拜撰。浦山弟子邑廩生蘇昭德拜書。捐題姓氏開列於左。

儒山廟は、海澄県の西にある古廟である。開漳聖王を祀る。これまで、海澄県に定住している者は、毎年立春の日、儒山廟で田植えの祭祀を行っていた。しかし、儒山廟では長い間厳粛な祭祀が行われず、倒壊してぼろぼろになって何年も経っており、人々もこれを復興させようとはしなかった。嘉慶辛酉年（一八〇二）、監生の蘇王璘らが、氣力を奮い起こして再建の仕事を引き受け、民衆に寄附を募って再興した。前座の廟宇は広々として雄大である。後ろには仏寺があつて、観音大士を祀る。丙寅年（一八〇六）になって、風雨のために浸食されて壊れてしまった。「蘇」生はまた寄附を募って建て直した。私は海澄県知県として赴任し、ここで政務を執っている。前後の廟宇の外観をうかがい見ると、ともに光り輝いて全て新しくなったかのようであつた。この神様の殿宇はこの先ずっと盤石であろう。王璘がはじめに率先して義拳を呼びかけた出来事は、民を教え導き、よい風俗をもたらすのに十分であろう。これは記憶にとどめておかなければならない。文林郎知海澄縣事張家幹が拜して著述する。浦山弟子海澄縣學廩生蘇昭徳が拜して書く。寄附者の姓氏は左に列記する。

これによると、儒山廟は長年の間祭祀を行うものもおらず、壊れて寂れていた。そこで、嘉慶辛酉年（1166年、一八〇一）に監生の蘇王璘らが人々から寄附を募って再建し、前座を立派なものに建て直した。後ろには仏寺があり観音大士を祀っていたという。蘇王璘は嘉慶丙寅年（1111年、一八〇六）にもまた資金を募って廟を修理している。現存の儒山廟は、この当時の様式を受け継いだものだと考えられる。

廟の管理に関わる諸事を取り仕切る役員である董事として、石碑には「修職郎蘇天仁、監生王君顯、顏烈現、蘇国修」の四人の名が記されている。ここには、儒山廟の所有を主張している李氏の姓名は見いだされない。捐金者一覧には王姓と蘇姓の者が多く、李姓の者は一人しか見いだされない。また、現地調査によると、現在儒山廟の位置する嶼上村は複数の姓の人々が居住する雑姓村であり、李姓は他の土地へ移ったという。しかしながら、少なくとも乾隆三十八年（1773）以前の何れかの時期には李氏が儒山廟周辺に居住していたはずである。李氏はいつ去ったのか。

清初、九龍江デルタの社会はきわめて困難な状況に置かれていた。順治十八年（1661）および康熙十七年（1678）の二度にわたる遷界令の該当地域に含まれるためである。遷界令とは、鄭成功の海上勢力を封じ込めるために清朝が実施した海禁政策であり、住民を強制的に内地へと移住させ、牆で境界を設けることで海上勢力との接触を遮断したものである。しかし、この政策は、鄭氏に対してはさほど効果はあげられず、逆に当地の住民の生命や地域社会が甚大な被害を受けた。住民の強制排除は徹底したものであった。無人になった郷里は荒廃し、みな全て焼き捨てられた村落、田地や家屋さえもあつた。住み慣れた土地を離れて多くの者が生計を失つて困窮し、家族・宗族や地域社会は瓦解し、様相が一変してしまつた。⁽²⁷⁾ 儒山廟のあつた八都は、紙一重で遷界令の範囲には含まれなかつたものの、海澄県一帯は鄭氏集団と清朝との攻防戦により甚大な被害を受けた。⁽²⁸⁾ 康

熙二十三年（一六八四）における遷界令の完全撤廃の後も、しばらくの間は宗族の凋落が続いた。『白石丁氏古譜』ではそのときの状況について以下のように記されている。

最可憾者、辛丑之間、海上割拠。我皇朝、遷内地之民、俾勿与通。於是、田野尽荒、廬舍尽壞。嗟、我族人、破家蕩産。乃有不肖之流、遂凶猷地於仇家。⁽²⁹⁾

最も遺憾であるのは、順治辛丑（一六六一年）の間、海上勢力が割拠し、我が天朝は内地の民を移住させて、これらの勢力と通じさせないようにした。そこで、田畑は荒れ果て、家々は全て破壊された。ああ、我が族人は身代をつぶし家産を失った。それなのに一族に愚かな輩がいて、とうとう仇敵の家に田産を差し出してしまった。

このように、土地を放棄して移住したために田畑や家は荒廃し、財産を失って、残った土地を他家に売り渡す者もいた。李氏一族の「儒山廟誌」や儒山廟の碑文には、廟が崩壊した様子が記録されていた。すなわち、李氏一族を含め儒山廟一体の人々は清初の混乱時に他の土地へ移り、そのために廟が荒廃したと考えられる。その後、李氏は乾隆二十八年（一七七三）に族譜を編纂し、同時に改めて廟の記録を書き記した。これはこの時期に宗族を再建する動きがあり、本来の居住地における土地の所有と管理の権利を主張しようしたのではないだろうか。しかし李氏が儒山廟周辺に戻ってくることはなく、廟は荒廃したままであった。儒山廟は新しい住民の手によって建て直されたのである。このとき、山左の廟の陳元光を祀る中進と後進の観音大士を祀る仏寺は再建され、現存している儒山廟はこれを受け継いだ者であると考えられる。しかしながら、現存の廟とは配神に変化が見られ

る。本来は中進に陳元光と共に馬仁が祀られていたが、それは姿を消し、代わりに李伯瑤および妻の金氏夫人が祀られている。崩壊した前進には李伯瑤と一三人の息子の神像が安置されていたが、李伯瑤は前述のように陳元光に廃止され、一三人の息子の神像は現存しない。山右の閔帝を祀った一廟、真ん中の李氏の祖先の位牌を安置した一廟も修築されなかったと考えられ、現存しない。なぜ陳元光と李伯瑤および観音大士のみが「復活」したのかは史料からは判然としないが、おそらくは、これら三柱の神々が主に信仰を集めていたのではないか。

前章で述べたように、現存の趙山廟が乾隆年間（一七三六―一七九五）に建てられたというのも、遷界によつて一度破壊された廟を当該時期に建て直した可能性が高いといえよう。遷界令は九龍江デルタの宗族の秩序にきわめて大きな影響を与え、遷界後に乾隆から嘉慶年間（一八世紀末から一九世紀初頭）に再興がみられた。これと同様に、この地域で信仰される神々や祠廟も影響を受け、再興され当地で信仰され続けたものもあれば、廃れたり淘汰されたり、あるいは当地を去った人々が神像を携え新たな土地で廟を立てて祀られた神々もいたことがわかる。

第四章 天宝路边韓氏と路边威惠廟

本章では、韓氏一族の集住する漳州市薌城区天宝鎮路边村路边社の路边威惠廟と当該廟に関する伝承から、当該廟の歴史と韓氏一族がどのように陳元光信仰を受容したのかを考察する。

漳州市薌城区天宝鎮路边村路边社は韓氏一族の集住地である。明代の行政区画では漳州府龍溪龍溪縣二十一都の天宝社であった。南靖県との境界近くに位置し「地凶」、商業地として宋代から栄え、明嘉靖年間（一五二二―一五六六）以降は四つの土堡がおかれるなど、繁華で交通・防衛上の要衝の地域であった。³⁰

韓氏一族は、陳元光の部将である府兵隊正昭徳將軍韓器の子孫であると自称している⁽³¹⁾。当地の伝承では、韓器は光州固始県の人で、韓堯・韓球という二人の弟とともに、陳政・陳元光の福建遠征に随従して漳州にやってきたという。その大軍はかつて天宝大山を通りかかり、麓に駐屯した。これが今日の天宝鎮路辺（輅軒）社であるという。韓氏三兄弟は陳元光とともに蛮僚を平定し、器はその功績により昭徳將軍となつて雲霄に駐鎮した。その後、漳州城の南の蓮浦（洪塘社）に遷居し、韓器の子孫の韓観佑が元代泰定年間（一三二四―一三二八）に路辺社に戻つてきたという（路辺社の韓氏の開基祖）。二〇〇四年に編纂された『韓氏家譜（統譜）』によると、三兄弟の子孫は現在、蓮浦（漳州高新技术産業開発区顔厝鎮宅前村蓮浦小区）・天宝路辺社などに集居しているという。路辺社にはもとは黄・林・韓の三姓が住んでいたというが、現在は韓姓の単姓村である⁽³³⁾。韓氏一族は、天宝鎮を中心として、主に南靖県方面に分布している。漳州市区、南靖県、龍海市などの韓氏は、ほとんどが天宝路辺から分かれ出てきたものであるという⁽³⁴⁾。韓氏一族の重要施設として、路辺社の威恵廟、韓氏宗祠および万春樓、天宝樓が存在する。威恵廟は、韓氏兄弟が伝え残した史跡という伝承がある一方で、南宋時代に陳氏の人が創建したともいわれている⁽³⁵⁾。

路辺威恵廟の前殿では威恵廟で陳元光（主祀）と馬公爺と韓氏を祀る。馬公爺とは「威武輔順上將軍馬仁」、韓氏とは「馬仁の妻策応妙英夫人」であるという⁽³⁶⁾。韓氏は第一章で触れた陳氏の族譜の部将リストに見いだされ、「聖王部下分營將、馬仁、任明威將軍、追封為殿前都檢使威武輔順上將軍。韓氏輔順之妻、蔭封為策応妙英夫人」とある。馬仁の妻として韓氏Ⅱ策応妙英夫人が祀られていたのは、筆者が訪問した限りではこの廟だけであった。聞き取り調査によれば、韓氏は韓器の妹であるという。

中殿は保福庵であり、観音仏祖を祀っている。観音仏祖の木像は天宝路辺社の開基祖である韓観佑が喜捨して

奉納したもので、背の上には韓観佑の名が刻まれている³⁷⁾。すなわち、この廟の壇越主である。後殿は「崇徳堂」といい、唐昭徳將軍韓器の後裔で、仕宦したものを祭る。開基祖観佑公・長房世興公（均宇）・次房兆興公（均海）・三房文興公（均謙）・四房徳興公（均爵）の位牌がある。天寶威恵廟は、祠廟と仏寺、そして祖先の位牌を祀る施設の三つが一つに合わさっている点が特徴である。第三章で論じた儒山廟も同様であり、福建南部特有の形態であると考えられる³⁸⁾。また、祠廟内に祖先である檀越主の位牌が置かれて祀られているのは、趙山廟、儒山廟、路辺威恵廟に共通している。路辺社には天寶路辺輅軒韓氏（太宗）の祠堂「遙追堂」があるが、韓氏一族が日頃から親しんでいるのは威恵廟のようだった。

「部将」の子孫を名乗る者たちは、陳元光の祠廟の中に同姓の武神を祀る傾向がある。韓氏の場合は、「馬仁の妻韓氏」が祀られていた。韓氏は、一族の先祖の女性を陳元光について信仰を集める輔順將軍馬仁の妻とする点で、自ら陳元光を頂点とする信仰体系に加わっている。一族の移住・定住の歴史だけでなく、信仰の面においても、陳元光の権威にあやかろうとしているといえよう。韓氏はいつどのように「馬仁の妻韓氏」を一族の先祖と見なすようになったのか、この展開を辿ることができる文献を未だ見いだせないため、今後の課題としたいが、韓器の様々な事蹟が、口述の伝承や近年発行された資料（これも口頭伝承を記録したものであろう）で語られているものであることを鑑みると、あるいはさほど昔のことではない可能性も考えられる。

おわりに

本稿では、陳元光とその部将の信仰が九龍江デルタ社会で如何なる展開を見せ、それにはどのような歴史的背景があるのかを論じた。その結果、以下のことが指摘できよう。

〔陳元光遠征随伴伝承〕と陳元光信仰の受容にはある共通点が見いだされる。それは、ある宗族が自らの経歴あるいは地域社会での地位に正統性を付与するために陳元光と一族を結びつける点である。陳元光信仰を担う人々は、祖先を祠堂において〈祖先〉として祀るだけでなく、神廟において〈神〉としても崇拜していた。祖先の経歴を〈陳元光遠征随伴伝承〉に結びつけることで、漳州地域内において中原からやってきた正統な漢族の子孫であることを主張し、社会的地位を上昇させようとした。一方で陳元光を頂点とする神々の体系においても、「元帥」「舍人」といった武神を自らの祖先と位置づけ、さらにその神々を、陳元光と関係があり、漳州を平定した武将であることとすることでその神々の地位を高めようとしたのではないだろうか。

J・ワトソンは、香港における天后（媽祖）信仰について次のように論じた。遷界令によって地域社会が混乱した後、王朝の勅封を得た正統な神である天后は沿海部の安定の象徴となった。もともと漁民や「水上人（蛋民）」によって信仰されていたが、遷界令の発布された清初以降は、大宗族の地域社会における覇権の象徴となった。そして地域の保護神として旧来の雑多な神々を飲み込む形で当該地域社会に普及したという。⁽³⁹⁾ 陳氏の族譜に見られる「紹興二十年の勅封」名簿は、祖先の武将一覧というより、何らかの民間信仰儀式の際に、招かれる神々の一覧のようにも思える。九龍江デルタにおける部将信仰も香港の天后信仰と同様に、元来からあった「元帥」や「舍人」という元来注目されていなかった雑多な神々が、地域の守護神であった陳元光の部将として、陳

元光を頂点とする信仰の体系に組み込まれたのではないか。本稿で論じた「部将」の神々が陳元光信仰の体系に組み込まれたのは早くても明代後期、おそらくは清代以降であると筆者は考える。とりわけ、遷界令発布後、宗族組織および祭祀組織によって維持されていた社会秩序が崩壊して、その再建の機運が高まった乾隆・嘉慶年間であった可能性が高い。なぜならば、九龍江デルタにおいては、(陳元光遠征随伴伝承)もまたこの時期における宗族再建とともに、陳姓以外の各宗族に普及していったからである。⁽⁴⁰⁾

註

- (1) 石田浩『中国同族村落の社会経済構造研究——福建伝統農村と同族ネットワーク』関西大学出版部、一九九六年、阮雲星『中国の宗族と政治文化現代——「義序」郷村の政治人類学的考察』創文社、二〇〇五年、潘宏立『現代東南中国の漢族社会——閩南農村の宗族組織とその変容』風響社、二〇〇二年など。
- (2) 鄧曉華・楊翊「宗族社会と民間信仰——三つの客家村落における民間信仰の人類学的考察」三尾裕子編『民俗文化の再生と創造——東アジア海域地域の人類学的研究』風響社、二〇〇五年、二二頁—六八頁、山本真『近現代中国における社会と国家——福建省での革命、行政の制度化、戦時動員』創土社、二〇一六年。
- (3) 山本真前掲書、鄧曉華・楊翊前掲論文。
- (4) 傅衣凌「論郷族勢力對於中国封建經濟的干渉——中国封建社会長期遲滯的一個探索」同『明清社会經濟史論文集』北京・中華書局、二〇〇八年三月、七九頁—一〇四頁(原載は『厦門大学学报』《社会科学版》一九六一年三期、厦門大学、八三頁—九七頁)、鄭振滿『明清福建家族組織与社会変遷』北京・中国人民大学出版社、二〇〇九年(初版は一九九二年)。
- (5) 鄭振滿「神廟祭典与社区發展模式——莆田江口平原的例証」鄭振滿『郷族与国家——多元視野中的閩台伝統社会』北京・生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇九年五月、二一〇頁—三三七頁(原載は『史林』上海・上海社会科学院歴史研究所、一九九五年第一期、三三三頁—四七頁、一一一頁)。

- (6) Barend J. ter Haar, "The Genesis and Spread of Temple Cults in Fukien," in E.B. Vermeer (ed.), *Development and Decline of Fukien Province in the 17th and 18th Centuries*, pp.349-396, Leiden: Brill, 1990.
- (7) 台湾の陳元光廟の代表的なものとして、台北士林区芝山巖にある惠濟宮がある。漳州系移民の多い宜蘭県には特に多く見られ、二八座存在するという。游謙・施芳瓏『宜蘭県民間信仰』宜蘭県史系列社会類四、宜蘭県政府、二〇〇三年、二六三頁。丁荷生 (Kenneth Dean) と鄭振滿によると、陳元光の著名な廟は、宜蘭県には二五座、台湾全島では七〇座存在するという。「閩台道教与民間諸神崇拜」鄭振滿『郷族与国家——多元視野中的閩台伝統社会』北京：生活・読書・新知三聯書店、二〇〇九年五月、一八七頁（原載は『中央研究院民族学研究所集刊』第七三期、中央研究院民族学研究所、一九九二年八月、三三頁―五一頁）。東南アジアでは、シンガポールの陳氏宗祠（保赤宮）をはじめ、マレーシアにはペナンの陳氏宗祠や漳州会館、マラッカの陳氏頼川堂などがあり、東南アジア各地の陳氏や漳州出身者の信仰を集めている。大川富士男「シンガポール・マレーシア地域の華人の会館と宗祠」『立正大学文学部論叢』七二号、立正大学文学部、一九八二年二月、一二頁および坂出祥伸『道教と東南アジア華人社会——その信仰と親族的結合』東方書店、二〇一三年、一二五頁。
- (8) 福建莆田平原の社会組織と神廟を中心とした祭祀組織の歴史の変遷については、鄭振滿前掲論文「神廟祭典与社区發展模式」および Kenneth Dean and Zheng Zhenman (鄭振滿), *Ritual Alliances of Putian Plain: Historical Introduction to the Return of the Gods*, Leiden: Brill, 2010. 閩南の宗族組織と神祇祭祀についての人類学的研究として、潘宏立前掲書。
- (9) 丁荷生・鄭振滿前掲論文、一八七頁。また林本諒「龍海市開漳聖王廟宇」同『龍海市開漳聖王相關參考資料』私家版所収。なお、林本諒氏は龍海市文史資料弁公室の元主任であり、長く『龍海文史資料』の編纂に関わってこられた。本資料は、筆者が二〇一〇年三月に漳州市区および龍海市において調査を行った際に、林氏のご好意により提供いただいたものである。
- (10) 詳細は、拙稿「明清時代の福建漳州府と陳元光遠征随伴伝承」『史朋』第四七号、北海道大学東洋史談話会、二〇一四年二月、九頁―一一頁。
- (11) 拙稿「宋明漳州陳元光考」陳支平主編『一統多元文化的宗教闡釈——閩台民間信仰論叢』廈門：廈門大學出版社、二〇一一年三月、一九二頁―二一八頁。
- (12) 康熙『平和県志』卷四、祀典志、廟祀、威惠王廟。

(13) 嘉慶『雲霄片志』卷三、風土志、歲時、上元。また、康熙『平和県志』卷一〇、風土志、民風、歲時に「(正月) 十三日、迎威惠王、遊行街市」とある。

(14) 註(10) 参照。

(15) 白石丁氏一族と『白石丁氏古譜』については、拙稿前掲「明清時代の福建漳州府と陳元光遠征随伴伝承」一六頁―一八頁、および拙稿「明代の福建漳州府における宗族の形成——龍溪県の白石丁氏をめぐる」『東洋学報』第九八卷第三号、公益財団法人東洋文庫、二〇一六年一月。

(16) 『白石丁氏古譜懿蹟紀』第九世丁知幾の伝記に附されている「漳州太守王公諱仲謙重修官港記」に対する丁世勲の考察。

(17) 小島毅「正祠と淫祠——福建の地方志における記述と論理」『東洋文化研究所紀要』第一一四号、東京大学東洋文化研究所、一九九一年二月、一六〇頁―一六四頁、鄭振滿「呉真人信仰の歴史考察」鄭振滿前掲『郷族与国家』一九一頁―二〇九頁(原載は廈門呉真人研究会・青礁慈濟東宮董事會編『呉真人研究』廈門・鷺江出版社、一九九二年、六六頁―七七頁)。

(18) 『懿蹟紀』丁遷伝に附された丁祖伝に「迨宋仁宗朝呉真君、以通家、善書。為吾舍再録此頌及敘、貽于祠堂、為世守芳規。其榜末題云、天聖五年臘月吉日、泉礁

江漢陽布叟呉本謹奉命拜書」とある。

(19) 陳元光に対する「州主」という呼称は、前述のとおり、康熙『平和県志』に見いだされる。そのため、清初頃に「州主」という呼称が一般的になっていたことがうかがえる。

(20) 『懿蹟紀』丁自得伝に「即端平二年捨建慈濟宮三座在官港上者。今五甲社趙山廟所祀檀樾是」とある。

(21) 拙稿前掲「明清時代の福建漳州府と陳元光遠征随伴伝承」および拙稿前掲「明代の福建漳州府における宗族の形成」。

(22) 『白石丁氏古譜』『白石丁氏懿蹟紀』始祖丁儒伝の二五世丁中駒による考察。丁中駒は乾隆十六年(一七五二)に貢生となった人物である。

(23) 石美には山美廟という祠廟があり、主に陳元光と輔勝將軍李伯瑤およびその夫人(金徳夫人)が祀られている。筆者が二〇一八年に当該廟を訪問したところ、重修作業中であった。「山美廟歴史及諸神簡介」『廟會走透透官網』<http://www.mhzt.com/forum.php?mod=viewthread&tid=1861>、二〇一六年一月二九日閲覧。

(24) 万曆『漳州府志』卷三〇、海澄県、雜志、宮廟および崇禎『海澄県志』卷一五、方外志、廟、儒山廟。

(25) 我將軍侯李公、協貞元運會、在京兆英勇之門、承衛

国公之賂謀、述宣昭公之燕翼。克肖祖父、素裕韜略、是天之重其所以生也。既重所生又厚所報、故使白瑤之名、崑生之字、顯著当世、動聖明知。因中郎將陳政出鎮泉潮、折柳圍營漳江、死於藍雷之賊。其子陳元光襲職、請救兵討賊。於綜章元年仲春朔、書到京師、皇帝聞之、臨衛國公府曰、(中略)今授爾劍印為將軍、直抵泉潮間、調將士救難、(中略)對曰、敬領聖旨、(中略)臣即竭力報陛下之知遇耳。遂用江普為左衝、盧振為右突、帶馬步三千、以助中郎將、即時啓行、迨六月望日至、見賊狡獪難得、乃以驕兵之計、致其來侵、生擒藍雷二賊殺之、三十六寨相繼而平、漳江之路大通。時屆燈節、散步微行、尽是純熙美景。公乃別中郎將、往京奏捷、登程數日、餘氛探知國無主、謀遂作孽於娘子洞、襲中郎將。先鋒馬仁赴難而死、前功幾於尽墜。(中略)遂遣人馳奮京兆令十三子亟請允命隨征、(中略)尽復漳江之地。(中略)皇帝曰、勲臣之後、復建奇勲、朕得斯人、為輔則勝、不得不得、妙算如神、誠在聖而不可知之之人也。遂詰封為輔勝將軍、聖侯生鎮漳江地方、生共天祿死則廟祀、爾十三子隨征俱有汗馬之勞、長當襲爵、餘皆封為防禦團練、使各兼庶秩、備要務以防南海百蠻、賜爾救命。(中略)永綏多福垂裕後昆享壽六十終於咸亨三年三三之辰。賜諡威惠、及上元元年殺日得黃妙

応之來扱吉於北溪地渡水而東、主葬在虎形山、号曰喬木世家。(中略)時元和十年吉旦、漳人請紀功勒石、群臣題奏。皇帝允之、命考功郎知制誥韓愈敘事為記而贈之詞。

(26) 光緒『漳州府志』卷一三、秩官五、国朝、海澄県、知県に「湘潭監生十三年任」とある。

(27) 遷界が行われた範圍が海岸線からどれくらいかの距離であったのか、文献により記述が異なるが、おおよそ三〇里ほどであったとされる。異説もあり、幅は四〇里、五〇里、二〇〜三〇里などとも言われる。浦廉一「清初の遷界令の研究」『広島大学文学部紀要』五、一九五四年、一三三頁、林田芳雄『鄭氏台湾史』——鄭成功三代の興亡実紀』汲古書店、二〇〇三年、一一四頁—一二五頁および一五五頁註一一。立ち入りを禁ずる境界線上には「界溝」や「界牆」といった構造物が築かれ、砲台や軍営を設けて嚴重に防備を固めていた。多くの者が零落し離散し、大量の死者が出た一方で、豪民や大商人が役人と結託して専横することもあった。これについては、以下に三つの史料を挙げる。

阮曼錫『海上見聞録』順治十八年(一六六一)八月条 京中戸部尚書蘇納海至閩、遷海辺居民之内地、離海三十里村莊田宅、悉皆焚棄。(中略)至是、上自遼東、

下至広東皆遷徙、築垣牆、立界石、撥兵戍守。出界者死。百姓失業流離、死亡者以億萬計。

江日昇『台湾外記』康熙三年（一六六四）三月条

率秦知鄭經已遁台湾、即移舟師到銅山。馳令各島暨沿辺百姓、尽移入内地。逢山開溝二丈餘深、二丈餘闊、名為界溝。又溝内築牆、厚四尺餘、高八尺（或一丈）、名為界牆。逢溪河、用大木椿柵。五里相望、於高阜処置砲台、台外二煙墩。一、三十里設一大營盤、營將、千、把總率衆守護其間。日則瞭望、夜則伏路、如逢有警。一台煙起、左右各相應、營將各揮衆合圍攻撃。五省沿辺如是。時守界弁兵最有威權、賄之者、縱其出入不問。有睡昏者、挖出界牆外殺之。官不問、民含冤莫訴。人民失業、号泣之声載道。鄉井流離、顛沛之慘非常。背夫、棄子、失父、離妻、老稚填於溝壑、骸骨暴於荒野。

屈大均『広東新語』卷二、地語「遷海」

歲壬寅二月、忽有遷民之令。滿洲科爾坤・介山二大人者、親行辺徼、令浜海民悉徙内地五十里、以絶接濟台湾之患。於是麾兵折界、期三日尽夷其地、空其人民。棄貨携累、倉卒奔走、野処露棲、死亡載道者、以數十萬計。明年癸卯、華大人來巡辺界、再遷其民。其八月、伊・呂二大人復來巡界。明年甲辰三月、特大人又来巡界、遑遑然以海防為事。民未尽空為慮、

皆以台湾未平故也。先是、人民被遷者以為不久即歸、尚不忍舍離骨肉。至是飄零日久、養生無計。於是父子夫婦相棄、痛哭分携。斗粟一兒、百錢一女、豪民大賈。致有不損鎰銖、不煩粒米、而得人全室以歸者。其丁壯者去為兵、老弱者展轉溝壑。或合家飲毒、或尽帑投河。有司視如螻蟻、無安插之恩。親戚視如泥沙、無周全之誼。於是八郡之民、死者又以數十萬計。民既尽遷、於是毀屋廬以作長城、掘墳塋而為深塹、五里一墩、十里一台。東起大虎門、西迄防城、地方三千餘里、以為大界。民有闌出咫尺者、執而誅戮。而民之以誤出牆外死者、又不知幾何万矣。自有粵東以來、生靈之禍、莫慘於此。

(28) 九龍江デルタ地域における鄭氏集団と清朝との交戦の状況については、林田芳雄『鄭氏台湾史——鄭成功三代の興亡実紀』汲古書院、二〇〇三年、九一頁—一五八頁。

(29) 『白石丁氏古譜』丁春芳（二五世）「文峰丁氏族譜序」康熙四十七年（一七〇八）。

(30) 万曆『漳州府志』卷一三、龍溪県、規制志、坊市および同書卷一四、兵防志、土堡。

(31) 韓器の名の初出は康熙『漳州府志』であり、また、第一章で言及した陳氏一族の族譜に収められている部將のリストにも名がある。伝は存在せず、如何な

る人物なのかはわからない。韓氏の族譜にも「皇唐開基始祖昭德將軍諱器【府兵隊正】」との記載があるだけである。むしろ韓氏の族譜の記載は、陳氏の族譜あるいは漳州府志の引き写しである可能性が高いと思われる。天宝路辺韓氏については、拙稿前掲「明清時代の福建漳州府と陳元光遠征随伴伝承」一五頁―一六頁。

(32) 『天宝輅軒韓氏家譜』に「天宝輅軒里路辺社開基始祖觀佑公、即太宗肇基公也。世伝源流枝派。有元始祖考諱觀佑公。于元泰定年間、卜居圻地、自漳城南門外蓮浦、遷居於漳州府城西門外龍溪泉廿一都天宝里路辺社。創業貽謨、建宅舍地、産業伝子孫永長焉。(中略)併輕財好施本地神廟、有捐助之功。觀音仏祖宝像背上、書觀佑公的名為記」とある。当該族譜は、原本は抄本、明崇禎十七年(一六四四)初修、民国十五年(一九二六)序がある。この影印が漳州市海峡文史資料館に所蔵されており筆者はこれを参照した。

(33) 漳州市天宝路辺威惠廟理事会編印『福建漳州天宝路辺威惠廟簡介』刊行年不明および『韓氏家譜(統譜)』。当該族譜は抄本、二〇〇四年刊、原本は韓氏蔵。この影印が漳州市海峡文史資料館に所蔵されている。本稿では該館所蔵の影印を使用した。なお、

崇禎十七年(一六四四)に初めて編纂され、清末の光緒年間(一八七五―一九〇八)までに数回の加筆を経て『天宝輅軒韓氏家譜』では、このような伝承は見いだされない。詳細は拙稿前掲「明清時代の福建漳州府と陳元光遠征随伴伝承」一五頁―一六頁。『天宝輅軒韓氏家譜』は手抄本で、原本は韓氏蔵。中華民国十五年(一九二六)の序がある。この影印が同じく漳州市海峡文史資料館に所蔵されており、本稿では該館所蔵の影印を使用した。

(34) 林殿閣主編『漳州姓氏』北京：文史出版社、二〇〇七年、三四八頁―三五〇頁。政協福建省龍海市委員会編『龍海姓氏』漳州：漳州文化与出版局、二〇〇八年、一九頁―二二頁。

(35) 前掲『福建漳州天宝路辺威惠廟簡介』。

(36) 前掲『福建漳州天宝路辺威惠廟簡介』。

(37) 「信士韓觀佑、謹命身己未建立、謹抽淨財命工彫造觀音、土地、善財、宝相已完工、于保福庵供養、祈求身富庵□□保合家平安者。太歳乙丑小建□年五月、信士韓觀佑」と刻まれている。

(38) 龍海市東園鎮過田村圳尾社にある龍応寺は、圳尾陳氏が管理している仏寺である。弥勒仏を主祀しているが、陳元光が配祀されているほか、北溪陳氏の開基祖の位牌が安置されている。圳尾陳氏の活動場所

ややひんごん。

Popular Culture in Late Imperial China, Berkeley:

- (3) James L. Watson, "Standardizing the Gods: The Promotion of T'ien Hou ('Empress of Heaven') along the South China Coast, 960-1960," in David Johnson, Andrew Nathan, and Evelyn S. Rawski (eds.),

University of California Press, pp.292-392. pp.306-310.

along the South China Coast, 960-1960," in David Johnson, Andrew Nathan, and Evelyn S. Rawski (eds.),

(4) 拙稿前掲「明清時代の福建漳州府と陳元光遠征随伴伝承」。

【附記】本稿は、学習院大学東洋文化研究所二〇一八年度「東アジア学」共創研究プロジェクトの助成を受け、「中日古代中国社会文化史学術研究会」(二〇一八年一〇月二七〜二八日、広州・中山大学)において報告した「九龍江三角洲地区的陳元光信仰和宗族社会——对陳元光与其部将信仰及相關宗族的初歩探討」を加筆修正したものである。